

M 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は1〜3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきれずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
0	0	●	0	0	0

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

道具は手の延長であり、手の行う仕事の補助である。それに対して機械は手の代用を果たそうとする。水車小屋の杵つきは、最も単純な機械の例である。すなわち、杵と臼という一組の道具に対して、これをあやつる手の代用として、水力を応用した動力回路を組みあわせている。この回路は単純なもので、からくりと呼べる程度のもにすぎず、そこに「内」があるとは言えないが、⁽¹⁾自動的な機械になれば、そこには明らかに「内」が現われてくる。典型的なものは蒸気機関車である。人はそれを見守り、石炭を炉にくべるなどの必要な配慮を加えるが、仕事そのものは機関車が行う。それは手の代用というよりも全身の代用、より正確には馬の全身の代用をとめる機械動物である。そこには道具とはことなり一つの複雑な「内」が存在し、この「内」がこの機械の文字通り「心臓部」を形成している。しかし、その果たすべき機能が人や動物の仕事の代用であるかぎり、その形は機能を反映している。^(b)驚進する機関車の図は、まさに走る人、走る馬の姿であり、その力動性は努力の力動性である。丸い胴をめぐる走る無数の配管はさながら血管であり、車輪は足であり、車輪をつなぐシャフトは手であって、時折吹き上げる蒸気は汗である。形は機能を反映しつつ、「内」を表現している。

蒸気機関車が電気機関車になると、「内」はより自律的なものとなり、⁽³⁾我々の想像力をこぼむ鎖された領域と化してゆく。その「内」は、蒸気機関車の丸胴と配管のように形に現われることはなく、あの四角い外形は「内」にも無関係であり、機能と対応するものでもない。このような在り方は、エレクトロニクス機器において最も明らかな現象を見せている。その機能さえ外に現われてくずに、一本のコードで「外」とつながれていることが珍しくない。機能と形の断絶の典型的な表われがスイッチや押しボタンの類である。全く同じ形をした多くのスイッチや押しボタンが、全く異なる機能をはたす。そして当の機能はすべて「内」にあり、形は機能から解放されるに至っている。多くが四角い形をしているのは、商品として梱包、運送する上での都合や、いくつもの機器を連結する上での利便を考へてのことであって、「内」なる機能とは関係がない。機能より解放された外形は、もし

人が望むならば、純粹な造形性の追求の場所となることも可能である。このような在り方に応じて、一般消費者向けの機器においては、「内」を考察する設計者と、「外」を按排するデザイナーの職分が分れてきている。

このような存在構成をもつ「第三の人工品」が藝術作品と異なることは、明らかであるように見える。作品において形と「内」は分離せず、形は人の眼差を「内」へと導く機能をもっている。エレクトロニクス機器における形と「内」の乖離は、作品のものではない。しかし、「内」を持つということは、道具に対して著しい対比をなすものであり、この点で第三の人工品は作品に近いと言わざるをえない。そして、作品において最も大切なものがその「内」であるならば、作品の「内」がエレクトロニクス機器の「内」といかに異なるかを解明しないかぎり、両者の差異もまた確かなものとは言えないであろう。特に、エレクトロニクス機器の分離した「形」と「内」とは、それぞれデザイナーと設計者の「作品」と見ることも可能であるだけに、この弁別は極めて重要である。

デザイナーの仕事は造形美術の一分野と見ることもできるから、彼のイメージを作品と見なしたところで、新たな問題が生ずるわけではない。しかし、設計者のアイデアを作品と見ることは正当なことか否か、これは作品概念のガイエンを確定する上で重要な要因である。建築家の設計が作品と呼ばれるのであれば、エレクトロニクス機器の新しい設計が作品と呼ばれるのは当然ではないか。それにもかかわらず、前者が創造と呼ばれながら、後者は精々発明としか言われないのは何故なのか。しかも発明と呼ばれるためには、そのアイデアが革新的なものである必要があるから、発明という資格は極めて高度の知的生産力に対応している。従って、発明を軽度の創造と見るのは不適當であり、むしろ両者の種的な差異を考えるべきであろう。それを考える上でも鍵となるのが「内」の差異である。

エレクトロニクス機器の「内」とは何か。それは回路である。入口があり、出口がある。入口から入った信号が、しかるべき変形をうけて出口から出てくる。この信号の通路がエレクトロニクス機器の本体である。いかなる変形を信号に施したいと望むかによって、回路は様々な複雑な在り方をする。しかし、いかに複雑なものであっても、通路であるかぎりにおいて、回路とは一つの空虚である。作品の「内」が精神的世界であり、従って一

つの充実であることと、これは根本的に対立する在り方である。では「世界」とは何か。少なくとも世界が回路とは異なる点を明らかにしないかぎり、これは□の問題にすぎないということにもなりかねない。たとえば、コンピューターは人工頭脳とも呼ばれるから、その回路を頭脳に擬して、一つの精神的宇宙と形容することは可能であろう。逆にまた、藝術作品は美的体験に向かって開かれており、その体験の展開をプログラムしたものに他ならないから、これを一つの回路と形容しても見当違いとは言えない。そこで、コンピューターの「内」が回路であり、藝術作品の「内」が世界である所以を明らかにする必要が生じてくる。

しかしこの解明は、右のように藝術作品を回路と呼んでみたことによつて、おのずからに半ばまではなされたと言つてもよい。何故なら、コンピューターの回路が、その設計者にとつても使用者にとつても、全く外なるものであるのに対して、⁽⁵⁾この回路は藝術家がたどり、鑑賞者があとづけてゆく経路だからである。「城」を読むとき、私はカフカ^(注1)の描いた不思議な世界の中にいる。私はKと共に雪深い村の中に入ってゆく。あたかも私のまわりには雪がふり、彼方には、近くて遠い城、いくら扉を開けても開けてもその奥処^{おくか}にたどりつくことのできない城がそびえているかの如くである。このようにその中に立つことこそ作品の体験であり、世界の体験でもあるが、コンピューターの回路は、我々と無関係に機能していればそれよいという性格のものである。すなわち、作品の「内」はその中へ我々が入ることのできるものであるのに対して、コンピューターの「内」は単なる物理的な「内」にすぎないのである。コンピューターを指して精神的宇宙と形容してみたところで、その「精神的」とは「頭脳」と似た働きをする」というだけのことであり、無機的な語感をもつ宇宙という単語は使えても、世界とは呼びにくい。世界とは、我々がその中に住み、息づくことのできるような空間である。作品の内⁽⁶⁾に含んでいる世界が、作者の精神によつて拓^{ひら}かれたものであることは間違いない。それゆえ、その世界は作者の固有名詞をカンして、^(注2)例えばカフカの世界とかカンジンスキーの世界とか言うわけである。これに対して回路の設計は、それがどれほど天才的なアイデアによるものであつても、通例、我々はそれを創造とは呼ばず発明と呼んで、世界の創出とは区別するのである。

(注) 1 カフカ—プラハのドイツ語作家フランツ・カフカ(一八八三—一九二四)。遺作の『城』は二〇世紀の代表的な長編小説の

一つで、Kはその主人公。

2 カンジンスキー——「カンディンスキー」という表記の方が一般的。ロシア出身の画家ワシリー・カンディンスキー(一八六六—一九四四)は抽象画の創始者の一人。

問

(A) \parallel 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) — 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) — 線部(1)について。ここで言われている「内」とはどのようなものか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 機械が自力で作動するために欠かせない入り組んだ装置を内蔵できる空間
 - 2 覆いを外したり各部分を解体したりすることで明らかに内側の仕組み
 - 3 人間の仕事の代役を果たせるほど進化した動物の体内を思わせる複雑な構造
 - 4 形状や運動として目に見えるようになる内部の動力源とその機構の働き
 - 5 人間が自分の内面を投影して動物に喩えてみたくなるような機械の特性
- (D) — 線部(2)について。この動詞の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 勢いよく入れる
- 2 満たすために入れる
- 3 慎重に入れる
- 4 燃やすために入れる
- 5 偏りなく入れる

(E) ——— 線部(3)について。ここで言われている「自律的な」とはどのようなことか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 人間の配慮に依存しない
- 2 人間の想像力が及ばない
- 3 機能が外形を規定しない
- 4 外形が造形的表現を促す
- 5 外形が規格化されている

(F) ——— 線部(4)について。「この弁別」とはどのようなことか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 第三の人工品の「形」と「内」が分離した事情を理解すること
- 2 デザイナーの作品と設計者の作品の質の違いを見分けること
- 3 単純な道具と複雑な機械の存在構成を対比して説明すること
- 4 作品とエレクトロニクス機器の種差を厳密に確定すること
- 5 作品の「内」と第三の人工品の「内」の差異を認識すること

(G) 空欄 にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 趣味
- 2 名称
- 3 形式
- 4 推論
- 5 感覚

(H) ——— 線部(5)について。ここで言われている「この回路」とはどのようなものか。その説明として適当なもの一つ、適当でないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ 作品概念を解明するためにコンピュータのプログラムに喩えられた藝術家の頭脳の活動
- ロ 藝術家が精神的な形式を与えて作品を創造するために用いる物理的な素材の集積
- ハ 鑑賞者がその後をたどって追体験しなければならぬ藝術家自身の美的体験の過程
- ニ 藝術家が創造して鑑賞者がその中で美的体験を重ねてゆくことができる精神的世界
- ホ その人の固有名詞をつけて誰々の世界と呼ぶのに値するような天才的な藝術家の精神

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

天空に輝く太陽を見たとき、どのような民族であれ、その不思議さに心を打たれたことであろう。そして、その重要さも感じたはずである。人間の特徴は、そのような体験を、自分なりに「納得」のゆくこととして言語によって表現し、それを他人と共有しようとするのである。それによって、人と人とのつながりができてくる。太陽を太陽という言葉によって共通に認識しているだけでは不十分なのである。言葉が組み合わさって、ひとつの物語を生み、物語という一種の体系を共有するのである。そのようにして「世界観」ができあがってくるが、同じ世界観を共有する集団もそれに伴って生じてくる。

かくして、ある部族はそれがひとつの部族としてのまとまりをもつためには、それに特有の物語を共有することが必要となったのである。その部族はどのような世界のなかで、どのようにしてできあがり、今後どのようになってゆくのか、それらを「物語」るものとしての「神話」によって、部族の成員たちは、自分たちのよって立つ基盤を得、ひとつのまとまりをもった集団として存続してゆけることになる。

フランスの神話学者デュメジルは、「神話をなくした民族は命をなくす」とまで言っている。つまり、⁽¹⁾神話はその民族を支える基盤なのである。しかし、現代人の観点から見て、神話のような 唐 稽なことがどうして、といぶかしく思う人もあるかも知れない。太陽が男性か女性かなどと馬鹿げたことを考える必要はない。太陽が灼熱した球体であることは、誰もが知っている事実ではないか、とその人は言うだろう。

古代ギリシャにおいても、太陽が天空に存在する球体であることを人々は知っていた。それにもかかわらず、古代ギリシャにおいて、どうして太陽は黄金の四輪馬車に乗った英雄である、などと信じられたのだろうか。

神話の発生を理解するためのひとつの考えとして、分析心理学者の C・G・ユングは次のような話を彼の『自伝』中に語っている。彼は東アフリカのエルゴン山中の住民を訪ね、住民の老酋長が、太陽は神様であるかいかという問いに対して、太陽が昇るとき、それが神様だと説明したのに心を打たれる。ユングは、「私は、人間の

魂には始源のときから光への憧憬があり、原初の暗闇から脱出しようという抑え難い衝動があったのだということを、理解した」と述べ、続いて、「朝の太陽の生誕は、圧倒的な意味深い体験として、住民たちの心を打つ。光の来る瞬間が神である。その瞬間が救いを、解放をもたらす。それは瞬間の原体験であって、太陽は神だといってしまふと、その原体験は失われ、忘れられてしまふ」と指摘している。

太陽は神であるかないか、などと考えるのが現代人の特徴である。そうではなく、ユングが「光の来る瞬間が神である」と表現しているように、その瞬間の体験そのものを、「神」と呼ぶのである。あるいは、そのような原体験を他人に伝えるとき、それは「物語」によって、たとえば、黄金の馬車に乗った英雄の登場としてしか伝えられないのであり、そのような物語が神話と呼ばれるのである。

神話の意味について、哲学者の中村雄二郎^(注3)は、「科学の知」に対する「神話の知」の必要性としての確に論じている。「科学の知」の有用性を現代人はよく知っている。それによって、便利で快適な生活をキョウジュ⁽¹⁾している。しかし、われわれは科学の知によって、この世のこと、自分のことすべてを理解できるわけではない。「いったい私とは何か。私はどこから来てどこへ行くのか」というような根源的な問いに対して科学は答えてくれるものではない。

中村雄二郎は、「科学の知は、その方向を歩めば歩むほど対象もそれ自身も細分化していつて、対象と私たちとを有機的に結びつけるイメージ的な全体性が対象から失われ、したがって、対象への働きかけもいきおい部分的なものにならざるをえない」と述べ、科学の知の特性を明らかにし、それに対して、「神話の知の基礎にあるのは、私たちをとりまく物事とそれから構成されている世界とを宇宙論的に濃密な意味をもったものとしてとらえたいという根源的な欲求」であると指摘している。科学の知のみに頼るとき、人間は周囲から切り離され、まったくの孤独にオチイ⁽²⁾るのである。科学の「切り離す力」は実に強い。

「物語」はいろいろな面で「つなぐ」はたらきをもっている。一本の木は科学的に見る限り、細かい事実は明らかになるとしても、あくまで一本の木である。人間はそれを「使用」したり「利用」したりはできるが、それ

と心がつながることはない。ところが、その木は「おじいさんがカクレキの記念に植えた木ですよ」という「物語」によつて、俄然そこに親しみが湧いてくる。あるいは、木を介して祖父の思い出が浮かんで来て、祖父との心のつながりを感じるかもしれない。いずれにしても、そこに情緒的な関係が生じるのである。

人間は「物語」なしには生きてゆけない。何らかの不思議なことや感動的な体験をしたとき、誰でもそれを誰かに「物語る」はずである。物語によつてその体験が自分とつながり、他人ともつながりをもつ。子どもたちは、母親に「聞いて、聞いて」と自分の物語を語る。大人も「物語」が好きである。それは「飲屋」にゆけばよくわかる。各人が自分の「物語」を一生懸命に語っている。適当な酔いによつて、通常の意識と少し異なる状態になるのは、物語のためには良い条件である。そこで、人には自慢話をしたり、失敗談を語ったりしつつ、自分が孤独ではなく他の人々とつながっていることを確認し、明日の仕事に向かうエネルギーを補給するのである。

そのような個人的な物語ではなく、この石の由来とか、この木の由来などということが多くの人に共有されること、それは「伝説」になる。伝説という物語によつて、人々は特定の事物と「つながり」、それを共有することによつて、人と人とのつながりも生じてくる。合理的な観点からすれば [a] 唐 [b] 稽とも思えるような伝説が、長い期間を経て語りつがれてくるのも、実はこのような物語の「つながり」効用のためである、と思われる。

特定の事物と結びついていたお話が、特定の事物や時を離れてしまい、「昔々、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました」というように、特定できない時の、特定できない人や物の物語となると、それは「昔話」になる。それは「桃から生まれた桃太郎」のように、たとい名前をもつとしても、非実在であることを端的に示す名となる。そしてそれは、日常の世界には存在しないことを知りつつも、人々の心のなかの「真実」を物語るものとして、民衆のなかに語りつがれ、生命を保ち続けるのである。

(河合隼雄『神話と日本人の心』による)

(注) 1 デュメジール——フランスの比較神話学者・言語学者(一八九八—一九八六)。

2 C・G・ユング——スイスの心理学者・精神科医(一八七五—一九六二)。

3 中村雄二郎——日本の哲学者(一九二五—)。

問

(A) 線部(イ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 空欄 a・b にそれぞれ漢字一字を補い、四字熟語を完成させよ。

(C) 線部(1)について。ここでいう「神話はその民族を支える基盤」とは、どのような意味か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 神話という固有の物語は民族に自らに対する誇りを与え続ける。

2 民族という人々のつながりから神話という共通の基盤が生じる。

3 民族が存続するには神話という特有の世界観の共有が必要である。

4 神話により民族の成立と今後の運命に関する説明がなされる。

5 神話という一種の体系の共有は民族の土台となる価値観を生む。

(D) 線部(2)について。「その瞬間の体験そのものを、「神」と呼ぶ」のはなぜか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 朝に太陽が昇ることは住民たちにとって心打つ圧倒的な意味深い体験であるから。

2 太陽を神だと言ってしまうと人々に救いと解放はもたらされないから。

3 原始の暗闇から人を解放するのは神にしか行えない救いの方法であるから。

4 黄金の馬車に乗った英雄の登場というのは神話に相応しい物語であるから。

5 救いと解放をもたらすのが太陽自体ではなく夜明けの瞬間の体験であるから。

(E) 本文で述べられている「科学の知」と「神話の知」の説明として適当なものを1、適当でないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 「科学の知」は対象の性質と利用法を分析的に明らかにするがそれとの心的なつながりは生まれない。

ロ 「科学の知」は宇宙を構成要素に分解し理解するのでその全体構造を解明することが出来ない。

ハ 「科学の知」は対象の性質と利用法を分析的に明らかにするために人は集団から孤立する。

ニ 「神話の知」は自分たちと周囲の世界に意味を見出したという人の本質的な欲求から生じる。

ホ 「神話の知」と「科学の知」は人に対する意味合いが異なるために両立しえない。

(F) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 人が不思議な体験を言語化し他人と共有しようとするのはそれを一般化しようとするためである。

ロ 科学の知を重視する現代人は太陽を神であるかないかという形で問いを立ててしまう。

ハ 物語はある出来事が多くの人の経験と長い時間を経たところに生まれる。

ニ 個人的な物語は明日の活動に向かうエネルギーを補給することにより後世に語り継がれていく。

ホ 虚構であることを知っているのに人々が現実味を感じつつ語り継がれていくのが昔話である。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

硯(注1)はや、石のなめらかなるをよしとす。石なめらかなるは、ただに玉にたぐひす。玉はや、価あなひかぎりなくたふとと言ふも、月なき夜をてらす光の、(1)むなしく目をよるこばしむには過ぎざるべし。硯はや、墨に筆に心あはせつつ、いにしへのこのままを記し伝へつつ、後に教ふるまめもの、(2)光こそおとりたれ、いかで玉の弟とや言ふべき。

誰か言ひし。「硯は鈍にぶきに生まれて静なれば、(注1)齡は世もてかぞふべし。墨や、(注2)文手や、(4)さかしきほどほどに、命も月に日に終はる」となん。(5)おのれ思へらく、この三たり心をあはせて、(6)はらからなし、千世万代の昔を伝ふるいさをの、齡も同じと言はばいかに。鈍きに生まれて、齡久しきと言ふは、きのふの山路の不材(注3)の木のとへこそあたりたらめ。(注4)海をふかめ、肌をなめらかにすりみがきつつ、玉にたぐらん物を、いかで鈍きに生まれしとは言ふ。

文は君なり。硯は臣(注5)のつかさ人なり。筆や墨や、(注6)各かろからぬつかさつかさにつかふまつりて、いみじきいさをたてたらんが、永き代に朽ちせぬめでたさよ。(7)いにしへ人の言ふ、「真手は壊れず。真硯は損せず」と。このことわりをうまく心うべかりける。(8)されば山に求め江に探るは、聖の君の、臣のつかさを選ぶにも似たりかし。

a を求むるは、顔よ人を選ぶに同じく、光やかたちをめぐむむなしわざにしもおぼゆれ。 b なめらかなりとも、堅きに過ぐれば、 c を鈍からしむ。やはしければ、するはくだくにひとし。そそやいにしへをとむれば、竹をあみて漆をおとせしと言ふ光の、石なめらかならずはと誰しもおぼすなるべし。また聞く、硯のおろそげなる、筆つひえ、墨あらびて、友を損なへりとや。ひとり硯のみならず、(9)よろづのことしからざるはなしとなん。(10)さは色やかたちを選ぶは後なりけり。

『藤篋冊子』による

(注) 1 硯はや——「はや」は感慨を表す複合助詞。「ああ硯というものは」の意。

2 文手——筆。

3 不材の木のたとへ——役に立たない木は伐られないため、天寿をまっとうできるといったとえ。

4 海——墨をためておくところ。

5 臣のつかさ人——臣下の官人。

6 つかさ——職務。

7 竹をあみて漆をおとせし——竹でできた書簡のこと。漢代以前では竹冊を革で編み、漆で文字を書いた。

問

(A)——線部(1)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 かなしく 2 無駄に 3 そらぞらしく

4 頼りなく 5 所在なく

(B)——線部(2)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 こまやかで気がきく存在 2 きよらかで輝かしい存在 3 まじめで役に立つ存在

4 小さくて小回りがきく存在 5 素直で邪魔にならない存在

(C)——線部(3)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 玉と同類のもの 2 玉と対をなすもの 3 玉より後に作られたもの

4 玉より下位のもの 5 玉と出所が同じもの

(D)——線部(4)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 おそれおおい 2 有能な 3 生意気な

4 もっともらしい 5 卑怯な

(E) ——— 線部(5)について。左記各項のうち、この段落に記された筆者の考えと合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 硯と墨と筆の寿命の違いよりも、それぞれが揃ってなす文が永い寿命を保つことに意味がある。

ロ 硯は長寿であるのに、その価値になかなか気づかれないのは、「不材の木」のたとえと同じである。

ハ 硯は玉とよく比較されるが、美しさよりも長寿という価値のほうをより重視すべきである。

ニ 硯は墨や筆よりも長寿であるので、のちの世まで永く文を書き記し続けることができる。

ホ 硯の役割や性質を考えると、「鈍きに生まれし」という硯に対する評は誤りである。

(F) ——— 線部(6)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 天命に従って

2 兄弟となつて

3 母から生まれて

4 腹をわつて話して

5 腹案を練つて

(G) ——— 線部(7)の文法上の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 「朽ち」は動詞、「せ」は動詞、「ぬ」は完了の助動詞

2 「朽ち」は動詞、「せ」は使役の助動詞、「ぬ」は完了の助動詞

3 「朽ち」は動詞、「せ」は使役の助動詞、「ぬ」は打消の助動詞

4 「朽ちせ」は動詞、「ぬ」は完了の助動詞

5 「朽ちせ」は動詞、「ぬ」は打消の助動詞

(H) ——— 線部(8)の意味を三字以内で記せ。

(I) 空欄

a

--

c

 にはそれぞれどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つずつを選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度以上用いてはならない。

1 墨

2 硯

3 玉

4 臣

5 文

(J) ——— 線部(9)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 どんな場面であっても叱らずにはいられないということだ。
- 2 どんな事物であっても負けないものはないということだ。
- 3 どんな物事であってもそうではないものはないということだ。
- 4 どんな存在であってもそれには及ばないということだ。
- 5 どんな場合であっても力を借りないことはないということだ。

(K) ——— 線部(10)について。筆者が「色やかたちを選ぶは後なりけり」と言うのはなぜか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 「色やかたち」は、飽きずに使うには、より慎重に選ぶ必要があるから。
- 2 「色やかたち」は、文字を記すのには関係がなく、それほど重要でないから。
- 3 「色やかたち」は、理性をまどわせ、正しい物事の判断を誤らせるから。
- 4 「色やかたち」は、流行に左右され、後世の人が評価するべきものだから。
- 5 「色やかたち」は、費用がかかり、よい筆や墨を買えなくなるから。

【以下余白】